

大連港から最終船の引揚者と知りました。翌朝、両親はトラックの荷物の中にかくれ、大連港まで、私は団旗を持ち、妹と大連港まで徒歩、風雪強く、港から吹きあがる潮風、岸壁にソ連兵が炊きたての白米を四斗樽に入れ、二個ずつ団毎に三十分であき樽にしる、早く早くとわめいている。

おばさん十人に出ただき、岸壁で風雪にさらされながらおむすびづくりを部隊生活で経験したやり方で、手順よく二十分で完了。

監視していたソ連兵は、早業にびっくり、倉庫に走ったソ連兵は、前団が時間切れで残した四斗樽に半分以上あるご飯を、これやると言つて渡された。

興安丸の船底生活、臨時の便所は甲板にあり、階段が急なため、老人、子供は無理で、バケツ一個を提出、私が甲板まで捨てに行くようにしました。

博多の町の灯を目前にしながら、前に船からコレラ患者が出たために、船内消毒四日間停泊し、やっと四月一日上陸、故郷大阪に向かった。

次兄は両親の元気な姿に会い、眼鏡の奥にキラリと

光るものをみた。そしてどちらかが箱に入つて帰ってくるのじゃないかと言つた。

よく生きて帰つてきてくれたと言われ、お互いに再会できたことを喜び、私は肩の重荷が一度に軽くなつた。

敗戦国民の苦痛 「脱走三千里」

兵庫県 神吉 一夫

ソ満国境の虎林、牡丹江と流転した敗残兵十五人は、ついに武装解除されて捕虜収容所入りとなり、「戦闘部隊」だからとして食事も与えられず、広場で寝起きするだけで、ただ死を待つか、シベリアに送られて死ぬか、どちらにしても「死ぬ」ことであると、ひしひしと感じられた。携帯食糧も底をつき始めたとき、ソ連領タイシエツト行きが開始された。脱出を決行し、生死を共にした戦友は、二回の決行で、十人の尊い生命を消してしまつていた。

満州の玄関である大連は二十万都市で、東洋のパワーといわれる美しい街であり、日本に一番近いところ、そこで二十数年間育った「大連」、なんとしても一族のいる所へ帰り着かねばと、やっとたどり着いたときは乞食姿で、歩行も困難な有様、肌寒さを覚える十月も中旬であり、すでにソ連軍が進駐し、八路軍もいて、現地民衆は日本人に対し、「侵略者の全財産を没収する」と、憎悪と怨念の目で見ていた。

日本人として国策に沿って一生懸命に働いて得たその財産。無一文となり生活にも困り、子供を売り、身を守る人さえ出てきた。まだ売り食いできる者は幸せな方である。

沙河口にあった鋳物工場は、暴徒と中国人従業員に取り上げられて近寄ることもできず、美濃街の地上三階、地下一階の店も、満蒙の奥地から着のみ、着のまままで脱出してきた国際運輸の社員らに開放していた。

繁華街の街角に、戦時、日本政府や軍部と結託してひと財産作った、と批判された者の名が壁にはり出され、毎日のように広場で人民裁判が行われ、一方的に

判決が言い渡され、問答無用であった。

シベリア送り要員が不足で、日中、通行中の日本人男子がそのままトラックに乗せられてどこかへ連行され、再び帰ることがなかった。そんな無法、暗黒の大連に変わりはてしまったのである。

ある日突然、日本共産党と、それに同調した若い日本人学生の男女十余人が、わが家七人の六畳と八畳の二間しかない所へ乗りこんできて、危篤状態の母親の枕元で、若い学生が日本の侵略、搾取、共産主義絶賛を、とうとうと述べ、最後に、共産主義は平等だから金を出せ、ときた。

「いままで各方面から再三再四、資金を要求され、もう差し出すものはない」と長老の伯父が答えると、病床の母を見て、私に「お前は脱走兵だろう、シベリア送りにするぞ」と捨てゼリフ。

二日に一回くらい八路軍の使役要求で若い者が狩り出され、私は出ていったが、一軒おいた隣りの「T」という男。彼は学生時代にスポーツで足を痛めて「召集」されなかったし、一番豊かな生活をしていた。

足の悪い「T」に代って私はよく使役に出たのだが、八路軍の追求が厳しくなると、彼は自分の身の安全をはかって、私の家を、「密告」したのである。

一族の長老である伯父が老虎灘の八路軍本部へ連行され、二日過ぎても帰れず、家族一同の心痛が続いたが、ようやく八路軍から「身の代金百万円と引替えに帰す」との連絡があった。しかしそのとき銀行はすでに封鎖され、手持ち現金も少なく、苦慮している最中だったが、日本橋郵便局本局が半日だけ営業すると聞き、伯母と共に麻袋を持ち、早朝から行列に加わった。しかし中国人の局員は、「敗戦国民になぜこの金を渡さねばならぬのか」と、横柄な態度で十枚ずつ一束にし「一、二、三」と数えながら渡す。わが家に帰ってゆつくり数えてみると、やはり数十枚が不足していた。

伯父の身柄引取りに、伯母に付き添うことを望んだが、「一緒に行く」と、あなたがシベリア送りになる恐れが多分にある。私ひとりで大丈夫だから帰宅を待っていておくれ」と、気丈な伯母は一人で出かけてしま

った。

夜中に伯父伯母が帰宅した。四国普通寺師団騎兵隊の陸軍伍長であった伯父は、「きびしくてこわかった」と言い、老いて人質となり、相当ひどく攻め立てられたらしく、恰幅のよかった太鼓腹がへこみ、頬はこけ、多くを語らず、ただ「みんな命を長らえ、一緒に日本内地に帰ろう」と。あとは涙であった。今は亡き伯父伯母には親身に最後までつくしていただいた「ご恩」は終生忘れ得ない。

このままだと私はいつまたどうなるかわからず、運命は予見し得ない。幸い売り食いでも生活ができる状況なので、病床の母を頼み、伯父の会社の役員S氏と密貿易を考え、実行することにした。

それは、S氏のいとこが満鉄の機関士なので、ソ連軍の列車を瓦房店まで運転しているのに便乗させてもらい、奉天や新京へ行くことである。

当時はまだ国共戦が盛んに行われていたが、大連には日本の香りのするお茶や甘味品が残っていたし、コ口島から帰国準備をする人たちの持てない荷物がある

はず、それらを物々交換にすればおたがいが喜ぶことだし、その荷物を大連に持ち帰って、いつ引き揚げが始まるかわからぬ人たちに安く売り、奉天、新京の情報も提供しようと、満鉄の作業服も入手し、ラポター（労働者）の腕章を準備し、いつ出発するか不明の中に連絡を待つことにした。

終戦の思い出

奈良県 菅 恒子

今年も終戦記念日が参りましたが、その度にいろいろの思い出が走馬燈のように頭に浮かんで参ります。

その当時の日本人は、何処に住んでいようと、それぞれにご苦労があつて、私よりもっと、もっと苦しまれた方も多いと思つています。

主人と私と子供二人で引揚げて参りましたが、そのことを考えてみても、私は幸せだと思つています。主人も今は病気をしていますが、何とか自分のことは自

分で出来ますし息子達二人も結婚して長男の娘も昨年秋、結婚して親子共にアメリカに住んでいます。

毎年思い出すことは断片的ですが自分も年をとつて来ましたので一度書いて置きたいとこの機会に筆をとつてみました。

主人が満州で現地召集になりましたのが終戦の年の五月十五日、新京神社のお祭の日だったと思います。長男の手をひいて、次男はおおつて、主人に手を振つて行つてらっしゃい、と気軽に送つたものです。

片耳聞えない主人は丙種で兵役をまぬがれていたのですが、片方の耳が聞えればよいとのことでした。その後消息はわかりませんが、当時外交部の近くで、訓練に励んでいる兵隊さんを見る度に、この人達も召集されたのだろうかとお胸が痛んだものです。

二男がお乳が足りなくて毎日牛乳の配給を頂きに行つていましたが、友達の叔母さんが勤めている陸軍の酒保（軍隊の売店のこと）という所に伺つた時に目を見張るものを売っており、びっくりしたものです。

鯖だったと思いますが生き／＼としていて、とても